

# 愛知県内における11～13世紀の煮沸形態

野末浩之

## 1. はじめに

東海地方の平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての陶磁器の様相は、生産地をいくつも抱えていることもあり、灰釉陶器とその系譜上のいわゆる瓷器系陶器にほぼ尽くされる。この時期の遺跡調査は窯跡を除いては僅かしかなく、集落等においても出土遺物は他の時期に比べて素材の点では多様になってくるが資料的に充分なものとはいえない。

東海地方において灰釉陶器・瓷器系陶器以外のこの時期の陶磁器資料は、土師器の椀・皿・鉢等の供膳形態と甕等の煮沸形態が知られている。このうち灰釉陶器で賄える椀・皿はともかく、煮沸形態として普遍的であるはずの甕・鍋類は他地域に比べて少なく、したがってその実態の研究は未だ立ち遅れているといわざるを得ない。

そこで小稿では現在までの資料をもとに、県内の平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて、特に11～13世紀の土師器を中心とした煮沸形態の様相を理解するため、研究史をふり振り返りつつ蓄積された成果を整理し、かつ若干の問題点を挙げてみたい。

## 2. 研究の現状

11・12世紀代の灰釉陶器と共伴する土師器煮沸形態が注目されたのは、1962年一宮市浅井町清郷遺跡の調査を嚆矢とする。これに加え、1965年の新城市馬場遺跡調査による出土例の概略が『日本の考古学』で報告されている<sup>(注1)</sup>。それによると、土師器煮沸形態(甕)はいずれも口縁部を残すのみで下部以下を欠失するものであり、口縁部はロクロ整形し、煤の付着がみられる。清郷遺跡では、製鉄工房址と考えられる竪穴遺構内から出土した甕を口縁部形態により2類に分類している。一方、馬場遺跡例は住居址内およびその周辺から、灰釉椀・皿・耳皿等とともに出土している。ここでは清郷例にみられるような肥厚する口縁部をもつもの他に、従前からの伝統を引くと思われるくの字状の口縁部をもつものも見出される。

1974年には清郷遺跡の報告が出され、出土土師器甕の口縁部をA～Cの3類に分類し、東海地方の他の出土例を挙げた上、「清郷型」として11世紀代における土師器甕の一形態と見做している<sup>(注2)</sup>。本例の年代はもちろん共伴灰釉陶器(美濃窯産が主体)の年代観によるものであり、他例についても窯式名は未報告ながら同時期と考えられる灰釉陶器を伴出するものである。一宮市内には、他にも灰釉陶器を共伴すると思われるくの字形の口縁部をもつ(長胴形の)土師器甕が数例あり、清郷型甕との関連が課題として提起された。

また、瓷器系陶器に共伴する煮沸形態としては、山茶碗窯から出土するなどすでに注目されていたいわゆる「伊勢型」鍋がある。これは、その名が示すように三重県を中心に濃密な分布を示す極めて特徴的なタイプの煮沸具であり、1985年にはこの伊勢型鍋を含め平安から中世にかけての煮沸形態の変遷および流通に関する論考が発表されている<sup>(注3)</sup>。三重県斎宮跡を中心としたこの編年では、煮沸形態の流れの中で「甕」が平安末期に至り「鍋」へと展開していくという見通しが出てきている。しかし、後にもふれるようにこの時期は各種の煮沸形態が出現しており、同形態でも報告者により名称が異なるなどの混乱がみられる場合があり、今後名称の整理・統一をは

かっていく必要がある。一般的には径に比べ器高が比較的到低く、口径の広い器形を漠然と「鍋」と呼ぶことが多いが、具体的な使用形態において中世以降を見越した煮沸形態の姿としてそれを意味づけるのであれば、「鍋」・「甕」の区別は重要である。

この伊勢型鍋は11世紀以降、特に13世紀後半から14世紀にかけての時期に、神奈川・静岡を含む東海地方全域に流通していることが知られ、煮沸形態といえはすべて在地生産ということではなく、このような土器の動きも問題になってきている<sup>(註4)</sup>。よく知られているように、この頃には渥美窯・常滑窯・瀬戸窯の陶器が各地に流通しているが、土器といえども商品経済の一翼を担うモノとして機能していたのであろうか。

土師器ではないが、常滑窯において煮沸形態のものが生産されていることが、常滑窯跡群の発掘調査によって明らかとなっている。器種には鍋・羽釜があり、他の貯蔵形態とは胎土・焼成が明らかに異なっている。これらは常滑窯跡分布域の中でも特に常滑市域の初期の窯跡からのみ出土していたため、地域・時期を限定できるものと考えられていた。その後の調査により、これらが尾張の平野部集落へもたらされていること、そして時期的にはやや下る時期にまで生産が継続されていることが判明している。

以上のように11～13世紀の煮沸形態は土師器では長胴形・清郷型・伊勢型の3タイプ、そして常滑窯産の鍋・羽釜の2タイプの存在が浮かび上がっている。現段階では、それぞれのタイプについては調査例および資料の蓄積とともにようやく研究が進展しつつあるところである。

### 3. 煮沸形態の諸類型

#### (1) 長胴形

前代から引き続き存在しているタイプで、くの字形の口縁をもち、肩部以下はタテのハケメでおおわれ、底部は丸底ないしそれに近い形態である。住居址内の竈で使用されるものであり、竈の消失とともに見られなくなるものと考えられている。灰釉陶器に共伴するこのタイプは、県内では一宮市氏永畑遺跡・宮前遺跡・六所遺跡<sup>(註5)</sup>・高田地内、稲沢市尾張国府跡<sup>(註6)</sup>等で出土しているが量的にはきわめて少ない。遺構に伴うものではないがともに出土した灰釉陶器は10～11世紀前葉頃であり、これ以後はみられない。現時点では資料に限りがあり断定はできないが、おおむねこの時期に長胴形はみられなくなるものと思われる。

#### (2) 清郷型

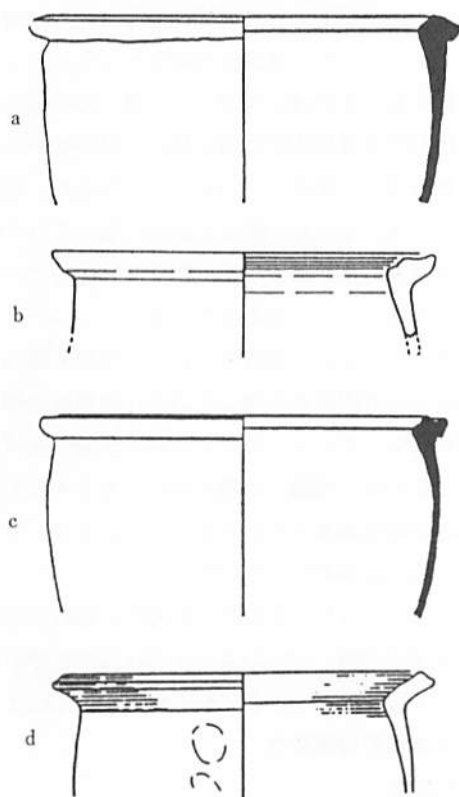
一宮市の清郷遺跡の調査を端緒として認定されているタイプである。清郷遺跡のほか県内では新城市馬場遺跡<sup>(註7)</sup>、西春日井郡清洲町朝日西遺跡<sup>(註8)</sup>・土田遺跡等で出土している。(第1表)また、

No	出土地	分類	時期	特記事項	文献注
1	一宮市清郷遺跡	a～c	11C前	竪穴遺構より灰釉碗(H-72)共伴	1・2
2	稲沢市尾張国府跡	a・b			6
3	清洲町朝日西遺跡	a・b	11C	SK 238より灰釉碗・土師皿共伴	8・45
4	〃 土田遺跡	b	11C	伊勢型1・2類に併行か	27
5	蒲郡市門前遺跡	a	11C前	大溝埋土より土師器碗共伴	20
6	豊川市山ノ入遺跡	a	10～11C		38
7	豊橋市苗畑D古窯群	a	11C前～12C前	平安窯器2～3型式	21
8	一宮町西浦遺跡	d	10C後～11C前	竪穴住居内より灰釉碗(0-53)共伴	15
9	新城市馬場遺跡	a・b・d	10～11	住居址および周辺より灰釉碗・皿・耳皿等共伴	1・7

第1表 清郷型出土地

主体的ではないが、三重県北・中勢部でも出土しており、意外に広い分布圏を有していることがわかっている。

火を直接受けるため脆く、器形全体を残すものはあまりみられないが、一部の復原された資料によると、口径は20cm前後と27cm前後のものがあり、肩がはずらず口縁から胴にかけてほぼ真直ぐで丸底となるようである。口径が拡大する点、頸部以下のハケメ調整がみられない点、器高と口径がほぼ同じになる点で長胴形とは明らかに別系統のものとして判断される。口縁部形態の差異によりすでに分類が試みられており、総合すると7類に分類される。さらにまとめると、口縁部が肥厚し端部を水平に引き出し面を作らないもの(a)、aの引き出した口縁をさらに受口状に作るもの(b)、さらにN字状に、屈曲させるもの(c)、口縁があまり肥厚せず端部に面を作りながらくの字形に屈折するもの(d)の4類とすることができよう。この分類にしたがった場合、尾張部はa～c、三河部はa・b・dという地域に



第1図 清郷型口縁部形態 ( $S = \frac{1}{4}$ )

a・c 清郷遺跡    b 馬場遺跡  
d 西浦遺跡

よる形態差を読みとることができる。しかし、相伴する灰釉陶器が複数型式にまたがること、遺構毎の一括遺物においても形態的にばらつきがみられることなどから、この分類が時間的前後関係を示すものではない。相伴灰釉碗の型式からすれば、おおむねK-90 窯式期からH-72 窯式期におさまりそうである。なお、三河の一部ではこれよりやや時期の下る灰釉碗を伴う例もあり、清郷型が山茶碗出現期に相伴するものとする見方もあるが、むしろ灰釉陶器末期に主体的にみられるものである。また、この時期に伊勢型も少量ながら1・2類が伴っている。例えば、三重県斎宮跡SE 2000からはH-72 窯式期の灰釉碗と伊勢型鍋2類が相伴して<sup>(注9)</sup>おり、並行関係を示す基準資料である。実年代については、基本となる灰釉陶器の実年代比定が未だ流動的であるためある程度の幅を見込むべきであるが、今のところは10世紀後半から11世紀前半頃に中心をおくものとしておく。

### (3) 伊勢型 (第2表)

扁球形の体部に短く外反し端部を肥厚させたり、折り返したりする形態をもち、器壁をきわめて薄く仕上げるといった特徴をもつ軟質の土器である。このタイプは「鍋」として認識されており、すでに触れたように前代の「甕」から連続する型式である。この「甕」から「鍋」への画期は、「甕」の画一化、具体的な使用形態として竈とのセット使用から五徳または土製支脚との併用、あるいは古代的な大陸系の炊飯祭祀の凋落等として評価されている。それはとりもなおさず古代

から中世への転換を意識したものと思われる。

県内においては調査例が多いこともあるが窯跡出土が目立ち、新田分類の1類から6類まで確認されているが、量的には5類が最も多く出土している。これらは伴出する灰釉陶器あるいは山茶碗の編年からおよその年代が比定されているが、検討を要する点も多い。両者の対応関係は、伊勢型1類がO-58窯式期、2類がH-72窯式期、3類が百代寺窯式期、4類が山茶碗3・4型式、5類が同5～8型式にはほぼ対応するものと思われる。

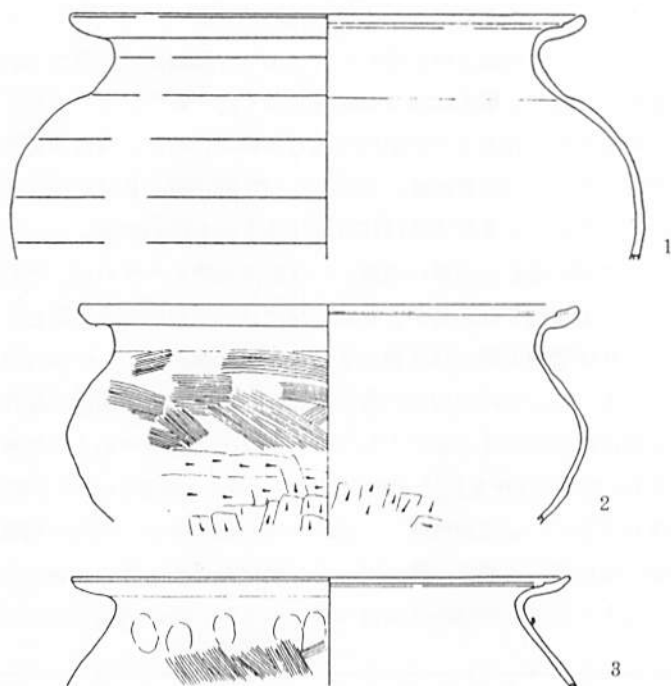
より破損することの多い煮沸という使用形態からすれば、それが出土した遺構の時期は限定できるのが本来的ではあるが、他の器種に比べて形態変化に乏しく存続期間が長かったためか、実際には共伴遺物の型式は複数にまたがる場合が多く、したがって遺物そのものの年代は幅広くなってくる。特に県内で出土の多い5類は、共伴する山茶碗の年代を単純に対応させると12世紀末から14世紀前半に及ぶこととなり、三重県出土例を中心とした編年より下限がやや下ることとなる。

なおこの5類は将来的には細分されるべきものと考えている。5類の形態としては、扁球形の体部から横U字形に口縁部が外反し、端部を深めに折り返し内側に明瞭な段を形成する。全形を残すものは少ないが、器高は口径の60%台の値におさまるものが通有で、最大胴径は口径を上回っている。以上のように形態的に特徴づけられるが、その調整手法は単一ではない。頸部以上をヨコナ

No	出土地	分類	時期	特記事項	文献注
1	名古屋市南区見晴台遺跡	5類			29
2	一宮市馬見塚遺跡	5類			
3	稲沢市尾張国府跡	1～5類	10C後～	SK131で灰釉碗・清郷型と共伴	22・23
4	清洲町朝日西遺跡	5類	13C前	SD09で山茶碗と共伴	3・8
5	〃 土田遺跡	1～6類	10C後～14C	SD05他で山茶碗等と共伴	8・27・44
6	甚目寺町甚目寺遺跡	5類	13C後	山茶碗共伴という	3
7	〃 森南遺跡	5類			3・31
8	〃 大洲遺跡	3類	12C末	SD04出土	31
9	〃 阿弥陀寺遺跡	5・6類	14～15C	SD08他出土	31
10	春日井市高蔵寺3号墳	5類(a)		13c前の山茶碗も出土	40
11	瀬戸市水無瀬中学校窯	5類(a)	12C末～13C初	窯内出土	25・26
12	〃 暁地区内	5類(b)		表土層出土	16
13	東海市柳ヶ坪遺跡	5類(b)		表土層他で出土	28
14	東浦町地獄谷1号窯	3類	12C前	山茶碗・皿共伴	18
15	半田市深谷古窯群	5類	12C～13C前	〃	24・30
16	常滑市出地田古窯	3類	12C前～中	常滑壺・片口鉢等出土	19
17	〃 鎗場・御林古窯群	5類	13C末～14C前	常滑壺・甕・片口鉢等出土	11
18	武豊町蛇ヶ谷7号窯	5類(b)	14C前	山茶碗共伴	33
19	美浜町釜山3号窯	5類(b)	13C後～14C前	山茶碗・皿共伴	17
20	知立市本郷貝塚	5類(b)			34・40
21	西尾市江原下遺跡	3類			4
22	豊川市麻生田大橋遺跡	5類(b)	14C	青磁碗片共伴	41
23	新城市杉山遺跡	5～6類	13～15C		4

第2表 伊勢型出土地

デすることは同じであるが、胴部はヘラナデもしくは指おさえの場合(a)と、横位のハケを施す場合(b)がある。底部は一様にヘラケズリと思われる。この調整の違いは、前後する型式との連続性から考えると時期差を示し、ハケ調整のものがより後出すると考えられる。胴部形態はその後やや張り出していた肩部がしだいにで肩となり、最大径が下位に移行していき、胴の張りも失なわれ口縁部が最大径となるというような経過をとることからみれば、ハケ調整を施すものになで肩のものがより多いのは、そのよう



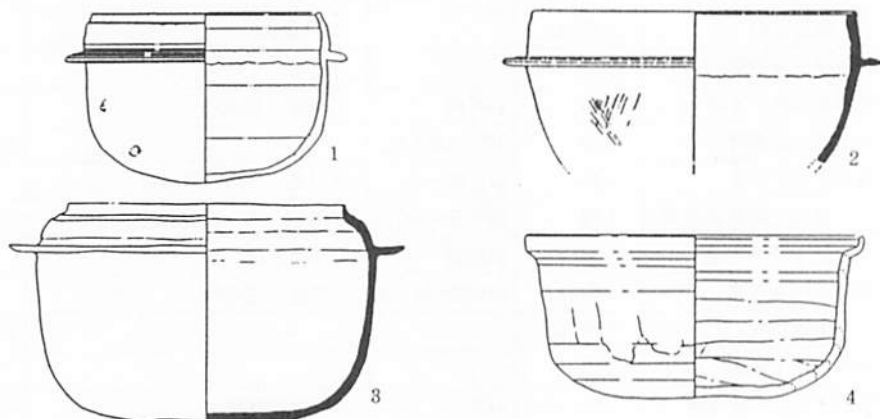
第2図 伊勢型5類形態 ( $S = \frac{1}{4}$ )

- 1 水無瀬中学校窯 (a) 2 阿弥陀寺遺跡 (b)  
3 土田遺跡 (b)

な形態変化の兆しのあらわれと理解されよう。以上のように5類を調整手法によって二分した場合、県内出土の5類の伊勢型は後半期に属するもの(b)が多くなっている。

(4) 常滑窯製品 (第3図・表)

常滑窯で焼成された煮沸形態には、広口で器高の低いいわゆる鍋と鐶が付いたいわゆる羽釜の2種がある。ともに硬質に焼き上げられる通常の主産品である壺・甕等とは胎土・焼成が異なり、軟質であり煮沸具として特別に製作されたものである。実際に煤が付着した状態で出土したものもみられる。これらは、常滑窯跡から出土しているものがほとんどであり、しかもその量は焼成



第3図 常滑窯産羽釜・鍋 ( $S = \frac{1}{8}$ )

- 1・4 鎗場・御林古窯群 2 金色3号窯 3 柴山2号窯

No	出土地	種別	時期	特記事項	文献注
1	清洲町土田遺跡	羽釜	13C前～中	SE01, SX01 で山茶碗・皿と共伴	8・44
2	甚目寺町清林寺遺跡	鍋・羽釜	12～14C前	包含層等より出土	37
3	常滑市鎗場・御林A 5号窯	鍋	13C後～14C前	焚口東側出土	11
4	“ “ B 3号窯	羽釜	“	焼成室基部出土	11
5	“ “ D 1号窯	“	12～13C前	2 個体	11
6	“ “ E 2号窯	“	“	前庭部出土	11
7	“ “ E 地点	鍋	“		11
8	“ 金色 3号窯	羽釜	“		32・42
9	“ 松廻 2号窯	“	“		32・42
10	“ “ 12号窯	鍋・羽釜	12C末～13C初	窯内出土	43
11	“ “ 13号窯	羽釜	“	“	43
12	“ 柴山 2号窯	“	12C前	焼成室前部より 4 個体	35
13	“ 二ノ田 7号窯	“	13C 中頃	2 個体	36
14	“ 古社古窯	“			35・42
15	“ 郷名池古窯	鍋			42

第3表 常滑窯製品出土地

総数に比べきわめて少ないため、流通を目的とする以上に陶工の日常什器として作られた可能性が高いものと思われる。しかし、窯跡以外でも尾張部のごく狭い地域に限って出土している。

これらは常滑窯稼働の初期から製作されており、形態的な変化をみせながら14世紀頃まで続くようである。13世紀後半から14世紀前半にかけては、伊勢型とともに窯跡より出土している常滑市鎗場・御林古窯跡群のような例もあり、両者の併行関係を示す資料となっている。

常滑窯産の羽釜は12世紀中頃から14世紀前半頃にかけて生産されるが、13世紀中頃までは鈎の先端に面を作り、肩部との接続部内面は粘土が充填されると指摘されている<sup>(注11)</sup>。しかし、窯跡での山茶碗等との共伴関係から同時期の資料をみると、実際には細部において変化が認められ、工人ごとのそれぞれの形態ともいうべき非定形的な様相が窺える。口縁端部の形態だけを取り上げてみても、平坦な面を作るもの、段をなすもの、尖り気味になるものに分類することができるし、鈎先端の形態でも面をなすものとそうでないものとが同時期に併存するというように個体差が大きい。一方、鍋は生産全期間を通じてほとんど変化がないようである。鍋と羽釜では羽釜の生産が優位であり、時期的には12世紀から13世紀前半に多く、以後は少なくなっている。このような量的な推移は、ちょうど伊勢型の出土量の推移と逆の傾向をあらわしており、煮沸具としてより機能を発揮する土師質の薄手のものへと転換していったものと考えられる。その転換期が13世紀後半代であり、伊勢型5類の時期の後半にあたる。そしてついに14世紀代に生産されなくなったのであろう。

#### (5) その他

以上、この時期にみられる煮沸形態として挙げた類型に属さない部類のものが若干認められるが、いずれも単発で類型化できるほどの数量はない。

東浦町八巻1号窯で土師質の煮沸形態が1点出土している<sup>(注12)</sup>。

口径25cm余りで受け口状を呈する口縁部に丸底で半球形の体部



第4図 八巻古窯出土煮沸形態

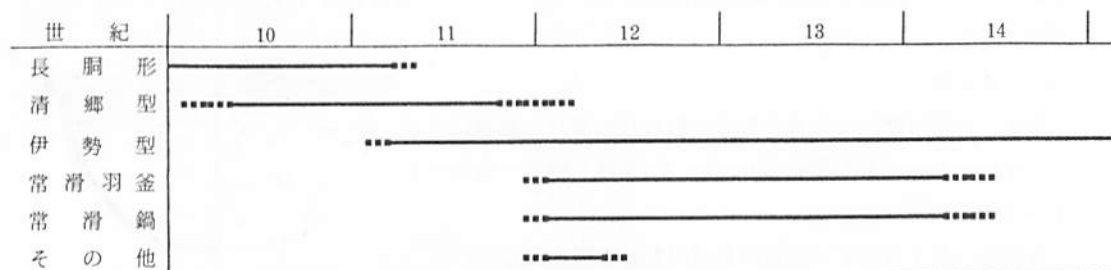
をもつものである。体部形態は清郷型に似るが独特の口縁部形態からは清郷型の範疇に含めることはできない。2次的に火熱を受け、外面には煤が付着している。時期的には常滑窯でも最初期にあたる12世紀前半である。他に出土例もみないため、定形的な煮沸形態をもっていない陶工の単発的な製作によるものと思われる。

#### 4. 煮沸形態の推移と鉄製品との関連

以上11～13世紀の煮沸形態の各類型の概要を縷々述べてきたが、大まかな時期的推移をまとめると表4のようになる。各類型あるいは各型式間の併行関係については、各類型が共伴灰釉陶器ないし山茶碗の編年により年代の比定がなされているため、灰釉陶器・山茶碗を介した並行関係は把握することができる。これらは同じ煮沸形態ではあるが、異なる類型のものが併用されている場合があり、使い分けが行なわれていたのかもしれない。こうした同時期の併存関係を示す事例がいくつかある。前にも挙げた三重県齋宮跡SE2000の一括遺物として猿投窯H-72窯式期の灰釉碗とともに清郷型と伊勢型（2類）が出土している。同様な例が稲沢市尾張国府跡SK131でもみられ、また常滑窯跡では伊勢型と常滑産羽釜が出土している。

分布状況から煮沸形態をながめてみると、清郷型と伊勢型はともに県下全域にみられ、量的ピークが時間的に前後することから、清郷型から伊勢型へと交替していく様子がみとれる。伊勢型の流通は尾張平野部からしだいに東へと拡がり、13世紀後半から14世紀前半（5類後半期）には三河にも行き届くとともに出土量も多くなっている。一方、常滑窯産の鍋・羽釜が知多半島と尾張平野部に分布しているが、時期的に清郷型と重なることはなく、清郷型から伊勢型へと主流が移る過渡期に現れ伊勢型と共存していく。このような複数の類型の煮沸形態が共存する傾向は14世紀以降にも続き、尾張部では土師器の羽釜・内耳鍋・耳付釜等が、三河部では同羽釜・内耳鍋<sup>(注13)</sup>・内耳鍋等が共存していく。

陶磁製の煮沸形態の減少の要因として鉄製煮沸具が使われだしたためであるとの見方も早くから指摘されている。すでに挙げた清郷遺跡をはじめとして9世紀以降製鉄遺跡が急増しており、中には鉄鍋やその鋳型が堅穴住居址などから出土している場合もある。また、地域によっては鉄釜の器形を土師器や瓦器が模倣したと考えられていることもあり、鉄製品の普及を窺わせる。しかし、実際にそれがどの程度使用されていたかについては、それ自体が腐蝕してしまったり、再利用されることもあったと考えられるため、条件が揃わない限り遺跡で検出されるものはきわめて稀であり、実証は難しい。また、製鉄遺跡のすべてにおいて煮沸具を生産していたとも言いきれず、直接結びつけて考えるべきではない。確かに鉄製品は増加しているが、煮沸具となると官衙的施設や都市部などに限定されるもので、減少するといっても一般の生活用具としてはまだ陶



第4表 各類型の推移

磁製品が主流であったろうと思われるのである。

県内においてはこの時期、鉄製煮沸具は知られていないため、土師器等への器形模倣の有無は不明であるが、今後検出されることがあっても普及度としてはきわめて低いものと考えられる。13～14世紀に伊勢型が飛躍的に増加し、器壁の薄化が進行していくのは、逆に鉄製品の普及度がまだ低く、それゆえ土師器の煮沸機能の効率化へと働いていったものとも考えることもできる。

## 5. おわりに

中世における陶磁器は、瀬戸・常滑等広域に流通するものと、土師器等のように生産地近郊で流通するものが重層的に展開することが知られている。古代においては煮沸形態は在地での生産・消費であるが、県内の11～13世紀の煮沸形態、特に清郷型・伊勢型においてかなり広い分布域が確認されたことは、これを広域流通型にまで解釈できる可能性をもつであろう。<sup>(注14)</sup>その一方、尾張平野部、三河部といった比較的狭い地域に分布するものも存在している。

小稿は、未だ不十分な資料ではあるが、近年ようやく具体相がわかってきた煮沸形態について整理を試みたにすぎず、他の素材のものも含めての類型構成や生産地の同定、流通構造等、今後に託された課題は多い。さらに地域によっては時期的にブランクもみられるため、資料の蓄積もまた必要である。また、今回挙げた遺跡のほかにも見直しにより相当数は追加が見込まれるであろうし、文献の確認漏れもあろうかと思う。今後、分類・時期等で御教示・御批判を仰ぎつつ基礎資料としてのデータを完備させていきたい。

注1 岩野見司他「古代・中世における手工業の発達」『日本の考古学』Ⅵ 1967

注2 岩野見司他『一宮市史資料編』4 1974

注3 新田洋「平安時代～中世における煮沸用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 1985

注4 最近では県内出土の伊勢型鍋の胎土分析により、それらがすべて同一生産地からもたらされた可能性が高いことが明らかになっている。北村和宏『杉山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1988

注5 注2に同じ

注6 北條献示他『尾張国府跡発掘調査報告書』Ⅳ 稲沢市教育委員会 1982

注7 岩野見司他「馬場遺跡」『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会 1967

注8 『埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ 愛知県教育サービスセンター 1985

注9 足立順司「東海地方東部地域の中世陶器・土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985

注10 『三重県斎宮跡調査事務所年報 1980 史跡斎宮跡発掘調査概要』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1981

注11 『鎗場・御林古窯址群』常滑市教育委員会 1985

注12 橋崎彰一「八巻古窯址群」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会 1962

注13 この場合、口縁部下で一旦くびれる遠江に多いタイプを指す。

注14 清郷型の場合、今のところ生産地を特定できないので流通論としては成立しない。

注15 須川勝以『一宮東部地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』一宮町教育委員会 1987

注16 藤澤良祐他『瀬戸晩地区内陸用地造成事業に伴う埋蔵文化財（緊急）発掘調査報告書』愛知県企業庁・瀬戸市教育委員会 1985

注17 宮川芳照他『知多半島道路県道半田南知多公園線関係埋蔵文化財調査報告書』愛知県 1968

注18 加藤岩藏他『知多半島道路埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会他 1969



- 注19 『愛知県常滑市出地田古窯址群発掘調査報告書』常滑市教育委員会 1983
- 注20 小野田勝一他『門前遺跡』蒲郡市教育委員会 1980
- 注21 伊藤憲『豊橋市南部における平安朝瓷器古窯址群』東海古文化研究所 1979
- 注22 北條献示他『尾張国府跡発掘調査報告書』Ⅲ 稲沢市教育委員会 1981
- 注23 北條献示他『尾張国府跡発掘調査報告書』Ⅴ 稲沢市教育委員会 1983
- 注24 近藤英正『深谷第6号窯・第7号窯発掘調査報告』『半田市立博物館研究紀要』第8集 半田市立博物館 1984
- 注25 『南山第2号窯発掘調査報告』瀬戸市教育委員会他 1981
- 注26 水野収『水無瀬中学校窯』『瀬戸市史 陶磁史篇』2 1981
- 注27 『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1987
- 注28 『柳が坪遺跡』東海市教育委員会 1971
- 注29 『見晴台遺跡第19次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館 1981
- 注30 『大高山第5号窯・深谷第2号窯』『半田市誌資料編』Ⅱ 1969
- 注31 北村和宏『大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1988
- 注32 橋崎彰一『松淵古窯址群』『金色古窯址群』『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会 1961
- 注33 『蛇ヶ谷古窯址群』武豊町教育委員会 1986
- 注34 『重原』知立市教育委員会 1988
- 注35 『柴山古窯址群』常滑市教育委員会 1974
- 注36 『二ノ田古窯址群』常滑市教育委員会 1978
- 注37 『清林寺遺跡』『甚目寺町文化財調査報告Ⅰ』甚目寺町教育委員会 1983
- 注38 『山ノ入遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会 1985
- 注39 『高蔵寺3号墳』『春日井市遺跡発掘調査報告』第6集 春日井市教育委員会 1974
- 注40 『知立市考古資料集成』知立市教育委員会 1983
- 注41 『麻生田大橋遺跡範囲確認調査報告』豊川市教育委員会 1978
- 注42 杉崎章他『常滑窯業誌』常滑市史別巻 1974
- 注43 『松淵古窯址群』常滑市教育委員会 1981
- 注44 『土田遺跡』『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅱ 愛知県教育サービスセンター 1986
- 注45 佐藤公保『中世土師器研究ノート(1)』『年報 昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター 1986